

香山リカ『ぷちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義—』(中央公論新社、2002年)**

無邪気に「ニッポン、大好き」とはしゃぐ若者が増えている。サッカーのワールドカップやキリンチャレンジカップで日本代表チームを応援する大観衆が「君が代」を歌い、誰が配ったものなのかを考えることもなく、手渡された「日の丸」を屈託なく振りつつけている。片や書店では、「かつての暗誦文化を復活させることで、衰えかけている日本人の心身を鍛え直すべきだ」と主張する齋藤孝の『声に出して読みたい日本語¹⁾』が所狭しと並び、戦時下の愛国詩朗読運動を彷彿とさせる「日本語ブーム」が沸き起こっている…(5-36頁)。韓国との共催でFIFA(国際サッカー連盟)ワールドカップが開催された2002年前半の日本社会は、まさしくこうした状況下にあった。ライブハウスで精力的に活動続けるラウド・ミュージックのバンドの歌詞に突如、「日本人よ、奮い立て」、「目を覚ませ」とのフレーズが増殖したのもこの時期である²⁾。本書の著者であり精神科医として知られる香山は、これら一連の現象に警鐘を鳴らす。これらすべては、日本人の心の奥底に潜む「日本は特別な国である」という思いこみと深く関わっている。特別にどうなのかがはっきりしないこの空虚な思い込みがようやく辿り着いたのが、いま日本各地で姿を見させているこれら「ぷちナショナリズム」の風景である。フランスでは、明日をも知れぬ生活不安に怯えた底辺層・失業者層が、極右政党・国民戦線の党首・ジャン＝マリー・ル・ペンの主張(「すべては移民が悪いのだ」)に希望を見出し、彼を決選投票へと進ませた。私たちは急がねばならない。日本代

表チームを応援するためだけに「日の丸」を振る新しい世代の感覚が、「これは戦争だ。日本の誇りを賭けてがんばれ」と「日の丸」を振る旧世代の感覚へと統合、回収され、フランスばりのラディカルなナショナリズムが姿を見せる前に何らかの手を打たねばならない(45-54, 124-126頁)、と。この回収が自然に進みつつあることに、政治権力の獲得や権力基盤の強化をねらう政治勢力によって人為的になされる可能性があることに、彼女は危機感を抱いているのである。

香山の危機感は決して絵空事ではなかった。当時、日本社会においては、「外国人による犯罪件数の増加」という客観的にして主観的な政府／公的機関の認識がそれを促すようなかたちで、メディアが喧伝する「フーリガンの恐怖」が「外国人の恐怖」へと増幅し、「外国人」=「犯罪者」=「脅威」という図式(いわゆる等価性連鎖)が既に立ち現れていた。彼女の言う「ぷちナショナリズム」がラディカルなナショナリズムへと変貌していく可能性は十分に考えられたのである。しかるに、本来であれば日本を牽引していかなければならないはずの言論人や知識人の多くは、この潜勢力³⁾を察知することができず、警鐘を鳴らす声をほとんど上げていなかった(166頁)。香山は言う。消しゴム版画家のナンシー関は、ワールドカップで異様に盛り上がる日本人の姿に気味悪さを感じ、「怖い」という言葉を連発していた。小説家の高村薫は、歴史を語ろうとしないこの国への違和感と無邪気な右傾化への違和感を理由に、ミステリーから「歴

* 中部大学国際関係学部国際関係学科

** ISBN : 4121500628

史を語る小説」へと転向する決意を固めた。こうした彼女たちの嫌悪感や違和感に対して、それをきちんと言語化し、歴史とのつながりの中で捉え直し、それが解消される方向に社会が向かうような指針を提示する責任が彼らにはある、と(171-176頁)。その解消に向けて社会が動き出すような分析と指針の提示、それを試みたのが香山の本書である。

日本は特別な国である。この思いこみは、いまに始まったものではない。なぜいま、ぶちナショナリズムとなって、それは着地点を見出したのか(54頁)。香山は読者に向けてそう問いかけながら、その解答となる二つの理由を挙げていく。まず一つ目は、日本人の心の仕組みが変化したこと、とりわけ若者の心的機制が変化したことである。テレビを付けると、力士や俳優、タレントといった「屈託のない二世たち」が「お父さん、大好き」と公言している。彼らは、親が築き上げた地盤や名声を利用して社会で有利なポジションを手にするに抵抗感を覚えない。しかも、それを見聞きした市井の若者たちも、彼らに反発することなくそれを肯定してしまうのだ(57-74, 80頁)。香山は言う。これは、幼児期にエディプス・コンプレックスを体験していない子どもが増えていることの証である。今の子どもたちは、何かをコンプレックスとして人格の内部に貯め込むだけの心的機制を作れなくなっている。「屈託のない二世たち」の登場は、こうした「エディプスなき親子関係」の結果にすぎない、と(68-69, 80-82頁)。

では、精神科医が直面している現代的な症例とはどのようなものなのであろうか。香山によると、その多くは、「分裂」と「解離」という二つの形態からなる「切り離し」と呼ばれる心理的メカニズムである(80-82, 91-95頁)。「分裂」と

は、「極端な感情で反応することによって、自分の行動や起きた出来事を客観的に評価して受け止める…ストレスを回避する」ものである(例えば、「大嫌いったら大嫌い。理由なんてない」)。それに対し「解離」とは、意識や記憶を失うことによって葛藤やストレスに対処したり、「別の人格が行ったことだ(私とは関係ない)」、「これは現実ではなく夢だったのだ」と考えることでそれらに対処したりするものである(91-95頁)。香山は言う。通院しているかどうかを問わず、切り離しを見せる若者が多くなってきた。「屈託のない二世たち」が、現代的な親子関係の果てに、コンプレックスやそれを生む複雑な心のプロセスと現在とを切り離して生まれた存在であるなら、歴史との切り離しを通じて生を授かったのがぶちナショナリズムである。「親なんだから好きであたりまえ」、「生まれた国なんだから好きであたりまえ」、この二つは明らかにつながっている、と(60, 83, 91, 93頁)。かくして、数々の切り離しを多用しながらも「本当に言いたいこと」を言っているとは思えない今の若者たちは、長いものには巻かれろと言わんばかりに、社会の多数派の意見に従うようになる。しかし、多数派の意見が今この瞬間どうなっているのかを逐一確認するのは億劫だ。むしろ、この人の言うことに従っていれば孤立することはないはずだ…。今の若者ほど「世間を代表する絶対的な＜鏡像＞」に弱い人びとはいない、香山はそう力説する(96-103頁)。

次に、二つ目の理由である。これは、先に挙げた「屈託のない二世たち」と彼らを擁護する市井の若者たちの話に直結するものである。第二の理由、それは、生まれによって有利か不利かがあらかじめ決められてしまう社会の出現、いわゆる「不平等社会」の到来である。とりわけ香

山が重視するのは、「収入や入る学校といった現実的な格差」が生きているだけでなく、「人生に対する価値観やイデオロギーの差を生む可能性」があるという点である(111頁)。そして、当時40代前半の新進気鋭の論客たち(村田晃嗣と西部忠)の主張を分析し、彼らがめざす日本社会の姿とは、人びとをぶちナショナリズムへと駆り立てる短絡的な社会でしかないことを明らかにする(112-121頁)。しかし、「社会そのものやそこに生きる人びとが『分裂…』[と]『解離…』というふたつの切り離しメカニズムを身につけ、目の前の歴史という大きな時間的流れの中で考えたり、反省や懐疑の念を抱いたり、後悔や汚点として自らの記憶に刻んだり、といったことを回避する方向に進んでいる。そういう中では、いま起きつつあるぶちナショナリズムに対しての危惧や警戒もほとんど生まれまい」だろう(122頁)。しかも、このぶちナショナリズムは、その屈託のなさをつまでも保ちつづけることができない。というのも、格差の拡大は、生まれながらにして恵まれた「屈託のないエリート層」の価値観とは異なるイデオロギーを底辺層に抱かせ、無自覚な排他的ナショナリズムへと彼らを導いていくからである(125頁)。中間的な生活水準さえ保てなくなった中間層は「屈託のないエリート層」と袂を分かち、最終手段であるラディカルなナショナリズムを選択する。そして、何事も歴史から切り離して思考するパターンを身につけた「屈託のないエリート層」も、社会のエリートでありつづけるために、同じ排他的ナショナリズムを選択する…(132-138頁)。香山の描く日本社会の未来像はきわめて悲観的である。しかし、この国の社会に働く潜勢力を視野に入れたとき、こうした悲観論を唱えざるを得なくなるのだ。

では、こうした潜勢力に歯止めをかける方法はないのだろうか。香山は、ぶちナショナリズムがラディカルなナショナリズムへと変貌していくことを防ぐ三つのシナリオを紹介している。まず、一つ目は、鬱積した不満を祭りへと回収する試み、具体的には札幌のYOSAKOIソーラン祭りである。少しばかりのルールを守りさえすれば、あとは創意工夫で作品を作り上げることができる。確かに、YOSAKOI方式は、エネルギーを持て余した若者にとって、またとない自己表現の場と化している。フランス型ナショナリズムへと彼らのエネルギーが回収されることを防ぐうえで、この試みは有効だと評価することはできよう。だが、彼らが協力して作品を作るうえで旗印となっているのは、ほんの少しだけ取り入れた「和」の要素、日本人としてのアイデンティティである。日本人であることをそこで確認し安心感を得ているだけなのに、そのことに無自覚であるということが問題なのだ。YOSAKOI方式は両刃の剣となり得る、香山はそう批判する(143-153頁)。

次に、二つ目のシナリオである。第二のシナリオ、それは「異なる層と結託する」である。香山は言う。例えば、社会学者の小倉千加子は、「これからのフェミニズムはエリート層やフェミニズムの勉強会に来るような専業主婦層ではなく…新・専業主婦層との結託が可能だ」と主張する。それは、彼女たちが自己利益を最優先するために日本の結婚制度を逆手にとっているからである、と⁴⁾。フェミニズムは理念的な理由から、外から結婚制度の崩壊を目指す。それに対し新・専業主婦層は、自己利益を最優先させるあまり結婚制度を内側から崩壊させてしまう。「片方は『意図的に』、他方は『期せずして』という差異はあるとしても、同じ結果に到達するふ

たつの階層の人たちが結託して、ある局面を乗り切っていく」(161頁)。これは、ぶちナショナリズムと戦ううえでも有効なモデルになる、香山は積極的に評価する(162頁)。その際、彼女が引き合いに出すのが、当時若い女性たちの間で大きな反響を呼んでいた『きみはペット⁵⁾』の主人公・スマレとモモの共同生活である(154-162頁)。

東大を卒業した後、ハーバード大学に留学し、現在は大手の新聞社で新聞記者として活躍しているスマレは、「ペット青年」・モモとの共同生活を通じて癒しと充実感を手にし、「競争や勝敗だけではない“階層外の世界”があることを知る」(156頁)。収入がないことから、スマレに依存した生活を余儀なくされているモモではあるが、抑圧されているわけでもなければ不当に利用されているわけでもないの、彼自身、この関係が続くことを望んでいる。共同生活を維持することに一致点を見出すこの二人が、ぶちナショナリズムに嵌るとは考えられない。例えば、「新聞社という男性社会で…理不尽な目にあい、…いつも『どうしてこんなことにならなきゃいけないの?』」(156-157頁)と自問する癖を身につけたスマレの場合、その姿勢は自ずから、「手渡された『日の丸』を屈託なく打ち振ること」にも向けられるはずだからである。「『すべてに懐疑的で歴史との『切り離し』もしない(できない)のでナショナリズムに走ることはないスマレ』と『関心が日々の生活の維持にしかないからぶちナショナリズムにも与することのできないモモ』」…(161頁)。共同生活は文字通り共同戦線と化す。香山の次の一節は興味深い。「『エリート層』にいる知識人男性の多くが社会に対する使命を果たすどころか、個人投資家となり、屈託ない“ニッポン好き”となってますます格差拡

大に寄与しているだけのいま、期待できるのはもはや『努力した割には幸福になれず、いつも“なぜ?”と自問しているキャリア女性』しかないのかもしれない…」(162頁)。組織においても社会においても、物事の裏を読む姿勢が抵抗の契機となること、それは間違いなく真である。

そして最後に、三つ目のシナリオである。潜勢力に挑む第三のシナリオ、それは、自覚を伴った『愛国ごっこ』である。ここで香山は、劇作家の山崎正和の説を紹介する(163-165頁)。ワールドカップでの「日の丸」や日本人の熱狂ぶりにラディカルなナショナリズムの萌芽を見てとるのは尚早である。なぜなら人びとは、それは芝居だからと自覚したうえで「愛国ごっこ」を演じていたにすぎないからだ…⁶⁾。これに対し香山は、楽観的すぎると批判する。「芝居であるからには、『演技をしている自分を見る自分』という視点」がそこにはあるはずである(166頁)。しかし、今の若者に欠けているのは、自己を相対化する冷めた視点である。「そういう彼らに『芝居心』を見ようとする山崎は、彼らを自分の世代の教養人と同じ繊細さ、複雑さを持った人間だと買いかぶっている」のではないか(167頁)。彼女の批判は手厳しい。

これら三つのシナリオに関する香山の分析と評価は、総じて妥当なものと言うことができよう。特に私が刺激を受けたのが、彼女も推奨する第二のシナリオである。これは、ヘゲモニー論の間隙を突くものではないだろうか。周知のように、ヘゲモニーとは、異なる諸要素の間に相対的な普遍性の次元を導入することで複合的な集合体を構築する実践のことである。根源的民主主義(ラディカル・デモクラシー)という名の抵抗政治は、民主主義の絶えざる深化をめざして反民主的な企図とのヘゲモニー闘争に従事

する⁷⁾。だが、それは、戦える位置を獲得した者のための議論、意図的に戦う道を選ぶことができた特権的抵抗者の戦略という側面を内包している⁸⁾。期せずして結託することになる人びとは、ヘゲモニー闘争の戦場から排除されているのだ。むしろ、ヘゲモニー闘争に従事する抵抗政治の側にアイロニカルな自己理解を備えるよう求めるポストモダニズムの戦略こそが、彼らを別の戦場へと誘う可能性を秘めている⁹⁾。香山が言う第二のシナリオとポストモダニストの言う「差異の称揚」との親和性にポストモダニスト自らがどう応え、潜勢力との戦いに馳せ参じていくのか。ポストモダンのエートスが「自らへのアイロニー」である¹⁰⁾なら、今の若者の屈託のなさはポストモダニズムの失敗を宣告するものとも言える。可能性はいまだ手にされておらず…。繰り返し訴えていくしかない。

注

- 1) 齋藤孝『声に出して読みたい日本語』(草思社、2001年)。
- 2) ラウド・ミュージックとは対極にあるが、若者が好む音楽であるという点では同じであるヒップポップにおいても同様の傾向が見られた。2002年10月に DeSTAR RECORDS から発売されたキングギドラのアルバム『最終兵器』に収められている「平成維新 feat.童子-T&UZI」と「真実の爆弾」はその典型である。香山との対談の中で福田和也は、このユニット名を挙げながら、パンクやヒップポップといったポップカルチャーがナショナリズムに接近しつつあることを指摘している。福田の見解については以下を参照。香山リカ／福田和也『「愛国」問答 —これは「ぶちナショナリズム」なのか—』(中央公論新社、2003年)、73-74頁。
- 3) 潜勢力とは、「闘争がなされる空間に働く歴史的な

力であり、言わば、数々の営為と傾向が呼びかけあい重複しあうなかで、空間を貫くにいたった『押し』である」(拙稿「記憶と表象 —世界と政治の意味をめぐる—」『神奈川大学評論』第36号、2000年、92頁)。例えば、いわゆる「自由主義史観」は、戦後の日本社会を貫く潜勢力に後押しされるかたちで登場し、「自虐史観」との戦いを有利に進めている。この点については以下を参照。同上、94-96頁。

- 4) 160-161頁。香山はこの記述を以下の文献の該当箇所から引用している。上野千鶴子／小倉千加子『ザ・フェミニズム』(筑摩書房、2002年)、127-128頁。
- 5) 小川彌生『きみはペット』(講談社、2000-2005年)。
- 6) 山崎正和「地球を読む」『読売新聞』2002年7月29日付。
- 7) ヘゲモニーと根源的民主主義については次の文献の該当箇所を参照されたい。拙著『越境する近代—覇権、ヘゲモニー、国際関係論—』(国際書院、2006年)、193-197、200-202頁; Ernesto Laclau and Chantal Mouffe, *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics* (London: Verso, 1985), in note 1, p.88 and pp.134,154-156,171-176. 山崎カヲル／石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治—根源的民主主義のために—』(大村書店、1992年)、142頁、注(1)、および212-213、247-249、270-277頁; Ernesto Laclau, "Subject of Politics, Politics of the Subject," in *Emancipation(s)* (London: Verso, 1996), pp.57-58.
- 8) 以下を参照。拙著『越境する近代』、212-213頁。
- 9) 以下を参照。同上、204-206、212-215頁。
- 10) 以下を参照。同上、210-211頁。